

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2006 ～ 2009

課題番号：18520296

研究課題名 (和文) 話しことば談話における文法的機能語の語用標識化

研究課題名 (英文)

'Pragmaticization' of grammatical function words and constructions in spoken discourse

研究代表者

藤井 聖子 (FUJII SEIKO)

東京大学 大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：70165330

研究成果の概要 (和文)：

本研究は、日本語と英語の話しことば談話における心的態度表意メカニズムを、実際の談話データの分析を通して明らかにし、その機能と表意手段の文法を、「談話と文法」「語用標識化」の観点から動的に探究することを目的として行った。本研究課題が特に着目したのは、文法的機能語が、本来の統語的特質を多少薄め、語用論的機能を強化し（また主観化・間主観化し）、話者の談話における命題態度および発話態度の表意手段として使用される現象である（藤井 2008 東京大学出版会）。本研究で、この言語現象を「語用標識化」とよび、その事例研究として、特に①接続形態素・節接続構文 (Fujii 2009, 2008, 藤井 2010, 2009, etc.) , ②「と」や「みたいな」で標識される引用節(句)構文 (Fujii 2009a, 2009b; Fujii 2006) に焦点をあてて分析した。

研究成果の概要 (英文)：

The major purpose of the present research project has been to explore linguistic mechanisms for expressing speaker attitudes and modality in Japanese and English discourse, paying particular attention to the 'pragmaticization' of relevant grammatical function words and constructions in spoken discourse. To this end, this project has put emphasis on analysis of actually-occurring discourse data as well as theoretical consideration of 'pragmaticization' and '(inter-)subjectification' in 'discourse and grammar', and carried out case studies dealing with several grammatical constructions, especially ① clause-linking morphemes and constructions (Fujii 2009, 2008, etc.), and ② quotative constructions featuring *to* (Fujii 2010, 2009, 2008, etc.) and *mitaina* (Fujii 2006).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
(平成18)2006年度	1,300,000	0	1,300,000
(平成19)2007年度	800,000	240,000	1,040,000
(平成20)2008年度	700,000	210,000	910,000
(平成21)2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,400,000	630,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：(1) 文法的機能語；(2) 語用標識化（文法化）；(3) 語用標識；(4) 接続形態素；(5) 主観化・間主観化；(6) 「談話と文法」；(7) 構文理論；(8) 用法基盤モデル

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 語用論や談話分析や会話分析の分野において進められてきていた語用標識の語用論的機能に関する分析の先行研究や理論を参考にし考慮するとともに、それらの研究で見落とされがちな問題に取り組んだ。特に、①含意(implicature, explicature)など語用と解釈における一般的法則に着目するのみでなく、個々の構文に特化した語用論的特質(construction-specific pragmatics)を明らかにすること；②構文に特化した語用論的・意味論的特質に着目することにより、語用標識の多義性・多層性やその文法化・主観化・間主観化を捉えることを、本研究の特徴的アプローチとした。

(2) 本研究は、構文理論及び用法基盤モデルにおける知見に十分に基づくと同時に、未着手の言語現象を分析対象とすることで、それらの新たな発展に貢献することをめざした。

## 2. 研究の目的

本研究は、日本語と英語の話しことば談話における心的態度表意メカニズムを、実際の談話データの分析を通して明らかにし、その機能と表意手段の文法を、「語用標識化」の観点から動的に探究することを主な目的とした。本研究課題で着目したのは、典型的な「文法化」現象のさらに先に起こってくる現象、すなわち、「文法的機能語」が、本来の統語的特質を多少薄め、語用論的機能を強化し、話者の談話における命題態度および発話態度の表意手段として使用され「語用標識」として定着する言語現象である。本研究では、この言語現象を「語用標識化」とよんだ。この事例研究として、特に、①節と節を繋いで複文を作る接続形態素、および、②「と」や「みたいな」等で標識される引用節(句)構文に焦点をあてて分析した。

## 3. 研究の方法

上記目的を踏まえた分析のために、成人および子供の話しことば談話データを収集し、話しことば分析における諸理論(発話単位 Intonation Units, 転記法理論、Intonation Units 等)を吟味しつつ、言語分析用資料を構築した(収録視聴覚メディアの電子ファイル化・精密な転記・転記ファイル化)。

これらの話し言葉談話データ、および書き言葉コーパス(国立国語研究所)を用いて、「談話と文法」理論の観点から、談話における文法的機能語・構文を分析した。特に、①節と節を繋いで複文を作る接続形態素、および、②「と」や「みたいな」等で標識される引用節(句)構文に焦点をあてて分析した。

## 4. 研究成果

本研究は、話しことば談話における心的態度表意メカニズムとその表意手段の文法を、実際の談話データの分析を通して明らかにし、「談話と文法」「語用標識化」の観点から動的に探究した。本研究課題が特に着目したのは、文法的機能語が、本来の統語的特質を多少薄め、語用論的機能を強化し、話者の談話における命題態度および発話態度の表意手段として使用される現象である(本研究で、この言語現象を「語用標識化」とよんだ)。この言語現象への着目とその分析へのアプローチ、および主な分析事例の研究成果概要に関して、藤井(2008)「話しことばの談話データを用いた文法研究：話し言葉で構文機能が強化する?」長谷川他(編)『心とことば——進化と認知科学のアプローチから』, 129-151. 東京大学出版会)で、専門外(専攻前)学部生レベルで理解できる解説論文として公刊した。

成人言語使用における文法的機能語・構文の語用標識化・主観化・間主観化に関して「談話と文法」の観点から、事例研究を行った。主な事例研究のカテゴリーは以下である：

① 接続形態素・節接続構文における話者の態度・モダリティ：主に条件構文における話者の認知的態度(epistemic stance)の表象メカニズム(条件構文の語用標識機能とその文法手段)に関して、英語と日本語における構文を対照しつつ分析した。国際言語学会議で発表した上で、Fujii (2009) *Modality, tense and aspect in Japanese conditionals. Current Issues in Unity and Diversity of Languages* を刊行した。

② 節接続形態素の語用標識化：節接続形態素の発話末での使用とその意味機能・形式の定着に関して、節接続構文の三つの構文タイプ(二節接続構文；評価性統合構文；単節縮約構文)を提案し、「～ないと」「～なきゃ」「～なくちゃ」等の縮約発話が定着する現象を、「縮約構文」の文法化として捉え、節接続構文・評価性統合構文との関連を分析しつつ、現代話しことばで進行中の文法化・語用標識化を論証した(藤井 2008 東京大学出版会 参照)。

③ 「みたいな」で標識される引用構文：「みたいな」で標識される名詞修飾節構文の形式的・意味的・語用的特色、とりわけその引用

機能を、話しことば談話を用いて分析し、「み  
たいな」の発話末用法においても名詞修飾節  
構文においても一貫して、話者の思考・発話  
を表象する諸相を浮き彫りにした。さらに、  
これらの現象を話しことば談話データで分析  
することにより、現代日本語話しことばで進  
行中の文法化・語用標識化における、構文的  
動機と談話上の動機との両者を論じた。(Fujii,  
2006. Quoted thought and speech using the  
*mitai-na* noun-modifying construction. Suzuki  
(ed.), *Emotive Communication in Japanese*, pp  
53-95. *Pragmatics & Beyond* 151. Amsterdam:  
John Benjamins Publishing Company. 参照)

④ 所謂引用助詞「と」で標識される引用節  
(句)構文：多機能性をもつ引用ト節(句)に  
関して、(1) 【内の関係】発話動詞・思考  
動詞・感情動詞等の文構成要素・補文とし  
てのト標識節を伴う「言語表現補語引用型」  
と、(2) 【外付けの関係】副詞節的外付け  
用法「言語表現外付け引用事態型」とを峻  
別する指標を提案し両者を包括する構文類  
型を考察しつつ、前者構文の構文的広がり、  
並びに、後者副詞節的外付け用法の統語的  
・意味的・語用論的特徴をコーパスデータ  
に基づき分析した。(Fujii 2010, Fujii 2009a,  
2009b, 藤井 2009a, 藤井 2009b 等で分析成果  
を発表した。)

さらに、「語り」の談話構造とその文法、  
Intonation Units と統語構造との関連性、選好  
的項構造(preferred argument structure)、談話に  
おける連接・接続、談話における指示メカニ  
ズムとその文法等を分析した。平行して、子  
供の文法能力・談話能力の獲得に関して、5、  
7、9 才児の語り談話データに基づき、子供の  
語りの談話構造の芽生え・発達とその表現手  
段としての文法の発達を分析した。

これらの研究成果は、第 5 回国際構文理論  
学会 International Conference on Construction  
Grammar (Fujii 2008); 国際言語学者会議  
(Fujii 2008); 国際語用論学会 (Fujii 2007);  
Frames and Constructions 学会 (Fujii 2009,  
Uchida & Fujii 2009); 言語処理学会 (藤井  
2010, 藤井・内田 2009, 内田・藤井 2009; 藤  
井・上垣 2008; 内田・藤井 2007)、言語科学  
会 JLS (Kurumada & Fujii 2006)、日本言語学  
会 (藤井 2009, 藤井・上垣 2008, 作田・藤井  
2006); 第四回国際構文理論学会 (Kurumada  
& Fujii 2006 ; Sakuta & Fujii 2006) などの国際  
学会・全国大会で発表した。これらの学会の  
Proceedings 予稿集・抄録集の掲載論文に加え、

Benjamins 出版の *Pragmatics & Beyond*, volume  
151 (Fujii 2006) や *Pragmatics and Language  
Learning*, volume 11 (Houck & Fujii 2006) や  
*Studies in Language Sciences*, volume 8  
(Kurumada & Fujii 2009) などレフリー付の英  
文著書・学術雑誌で出版した。2009 年度末に、  
これらの研究成果を藤井 (編著) 2010. 『研究  
論集 談話と文法 —文法的機能語の語用標  
識化—』(科学研究費補助金基盤研究 C(2)「話  
しことば談話における文法的機能語の語用標  
識化」研究成果報告) として取り纏めた。

またこの間、『談話と文法』という研究へ  
のアプローチ・理論・手法・先行研究を、大  
学院授業・セミナーおよび共同研究を通して  
研究室メンバーの大学院生に紹介・導入し、  
修士論文研究・博士論文研究を進めた。話し  
ことば談話における文法研究という趣旨・枠  
組みに基づく博士論文 加藤陽子「話し言葉  
における引用表現の研究——引用標識に注目  
して」(2008) が完成した。また、子供の談話  
コーパスを分析した修士論文 鈴木陽子「大  
人と子供の談話における「ねんね(する)」構  
文と「ないない(する)」構文の形式と意味—  
verbal noun(する)構文の習得研究に向けて—」  
(2008)等が完成した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に  
は下線)

[雑誌論文] (計 15 件)

- ① 藤井聖子. 2010. 「引用ト節(句)と共起す  
る語彙と構文 —BCCWJコーパスに基づく語  
彙・構文彙の構築に向けて—」『言語処理  
学会第16回年次大会発表論文集』, 450-453.  
言語処理学会
- ② Kurumada, Chigusa & Seiko Fujii. 2009.  
Creating Storylines: Acquisition of  
Topicalization and Aspect Marking in  
Narratives by Japanese Children. *SLS8.  
Studies in Language Sciences*, Vol. 8,  
93-108.
- ③ 藤井聖子. 2009. 「BCCWJ コーパスを用い  
た引用「ト」構文の分析—副詞節的外付け  
用法を中心に—」『日本言語学会第 138 回  
大会予稿集』, 342-347. 日本言語学会.
- ④ 藤井聖子・内田諭. 2009. 「フレーム間関  
係を用いた日英語の語彙分析 —「伝達」「判  
断」フレームの場合—」『言語処理学会第  
15 回年次大会発表論文集』, 530-533. 言語  
処理学会.
- ⑤ 藤井聖子・上垣渉. 2008. 「支援動詞構文  
における事態性名詞と動詞との項共有と連

- 結性:『日本語コーパス』を用いた分析』『日本言語学会第 136 回大会予稿集』, 432-437. 日本言語学会
- ⑥ 内田諭・藤井聖子 2009. 「日本語コーパス」における語彙のジャンル別特徴—クラスター分析とフレームの観点から—』『言語処理学会第 15 回年次大会発表論文集』, 442-445. 言語処理学会.
- ⑦ 内田諭・藤井聖子 2007. 「FrameNet の枠組みを応用した接続語の意味記述—while の場合—」『言語処理学会第 13 回年次大会発表論文集』言語処理学会 pp. 851-854.
- ⑧ 藤井聖子・上垣渉. 2008. 「支援動詞構文の分析: コーパスに基づく構文理論的アプローチ」『言語処理学会第 14 回年次大会発表論文集』, 943-946. 言語処理学会.
- ⑨ Houck, Noel & Seiko Fujii. 2006. Delay as an interactional resource in native speaker-nonnative speaker academic interaction. In Bardovi-Harlig, Kathleen, Félix-Brasdefer, César J., and Omar, Alwiya. (eds.), *Pragmatics and Language Learning*, volume 11, 29-53. Manoa, HI: Second Language Teaching and Curriculum Center University of Hawaii.
- ⑩ 作田千絵・藤井聖子. 2006. 「日英語におけるイントネーション・ユニットとその多機能性 — 統語的分断を引き起こしているのは何か? —」『日本言語学会第 132 回大会予稿集』 pp 183-188. 日本言語学会.

[学会発表] (計 26 件)

- ① Fujii, Seiko. 2009 (July 31-Aug 2). Lexicon meets construction: A FrameNet approach to TO-marked quotative constructions in Japanese. A paper presented at Frames and constructions: a conference in honor of Charles J. Fillmore. The University of Berkeley.
- ② Fujii, Seiko. 2009.9. Capturing constructional polysemy via frames and frame-to-frame relations: A lexical analysis of quotative TO constructions. *Pacific Association for Computational Linguistics*.
- ③ Houck, Noël & Seiko Fujii. 2010.3. Non-canonical Responses to Elicitations of First Opinions in Academic Discussions. AAAL Conference, American Association for Applied Linguistics, Atlanta, GA, U.S.A.
- ④ Uchida, Satoru and Seiko Fujii. 2009 (July 31-Aug 2). A Frame-Based Approach to Connectives. A paper presented at Frames and constructions: a conference in honor of Charles J. Fillmore. University of Berkeley.
- ⑤ Fujii, Seiko. 2008.7. Modality, tense and aspect in Japanese conditionals. A paper presented at the 18<sup>th</sup> International Congress of Linguistics, held at Korea University in Seoul.
- ⑥ Fujii, Seiko. 2008.9. The antecedent-only conditional constructions. A paper presented at the fifth International Conference on Construction Grammar (ICCG5), Austin, U.S.A.
- ⑦ Hasegawa, Y, K. Ohara, S. Fujii, R. Lee-Goldman & C. J. Fillmore. 2008.9. Constructions for measurement and comparison in Japanese and English. The fifth International Conference on Construction Grammar (ICCG5), Austin, U.S.A.
- ⑧ Houck, Noël & Seiko Fujii. 2008.3. Responding to Disagreement in Academic Discussion, AAAL Conference, American Association for Applied Linguistics, Washington, D.C., U.S.A.
- ⑨ Fujii, Seiko. 2007.7. Preferred argument structure and information structure in Japanese narratives. A paper presented at the 10<sup>th</sup> International Pragmatics Conference, Goteborg, Sweden.
- ⑩ Uchida, Satoru and Seiko Fujii. 2007.9. 'A FrameNet Approach to Connectives: The Polysemy of *While*' A paper presented at Pacific Association for Computational Linguistics (PACLING2007), Australia.
- ⑪ Kurumada, Chigusa & Seiko Fujii. 2006.6. Creating storylines: A developmental study on Japanese children's narratives. A paper presented at the 8<sup>th</sup> Annual International Conference of the Japanese Society for Language Sciences.
- ⑫ Sakuta, Chie & Seiko Fujii. 2006.9. Intonation units, information structure, and grammatical constructions in Japanese and English. A paper presented at the Fourth International Conference of Construction Grammar.
- ⑬ Kurumada, Chigusa & Seiko Fujii. 2006.9. Constructing storylines: A constructional approach to the structure and development of narratives. A paper presented at the Fourth International Conference of Construction Grammar.
- ⑭ 藤井聖子「引用ト節(句)と共起する語彙と構文 —BCCWJ コーパスに基づく語彙・構文の構築に向けて—」2010.3. 言語処理学会.

- ⑮ 藤井聖子 2009.6.「BCCWJ コーパスを用いた引用「ト」構文の分析—副詞節的外付け用法を中心に—」日本言語学会。
- ⑯ 藤井聖子 2009.3.「所謂引用助詞「と」が標識する構文の用法再考—フレーム・フレーム要素・フレーム間関係の観点から—」特定領域研究「日本語コーパス」平成20年度公開ワークショップ研究成果発表会
- ⑰ 藤井聖子・上垣渉 2008.6.「支援動詞構文における事態性名詞と動詞との項共有と連結性：『日本語コーパス』を用いた分析」日本言語学会第136回大会。

[図書] (計 11 件)

- ① Fujii, Seiko. 2009. Modality, tense and aspect in Japanese conditionals. Current Issues in Unity and Diversity of Languages.[Collection of the papers selected from the CIL 18, held at Korea University in Seoul, on July 21-26, 2008] CD-ROM. 韓国言語学会
- ② Fujii, Seiko. 2009. Capturing constructional polysemy via frames and frame-to-frame relations: A lexical analysis of quotative TO constructions. *The proceedings of the 11th Conference of the Pacific Association for Computational Linguistics*. CD-ROM.
- ③ Uchida, Satoru and Seiko, Fujii. 2007. A FrameNet Approach to Connectives: The Polysemy of *while*. *The proceedings of the 10th Conference of the Pacific Association for Computational Linguistics*. 154-162.
- ④ Fujii, Seiko. 2006. Quoted thought and speech using the *mitai-na* noun-modifying construction. Satoko Suzuki (ed.), *Emotive Communication in Japanese*, pp 53-95. Pragmatics & Beyond 151. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- ⑤ Fujii, Seiko, Takahiro Morita & Chie Sakuta (eds.) 2006. *Proceedings of the Fourth International Conference on Construction Grammar*. August, 2006. 245p.
- ⑥ 藤井聖子 (編著) 2010. 『研究論集 談話と文法 —文法的機能語の語用標識化—』2006年度～2009年度 科学研究費補助金基盤研究C(2)「話しことば談話における文法的機能語の語用標識化」(課題番号18520296 研究代表者: 藤井聖子) 研究成果報告書
- ⑦ 藤井聖子 2009.「所謂引用助詞「と」が標識する構文の用法再考—フレーム・フレーム

要素・フレーム間関係の観点から—」『特定領域研究「日本語コーパス」平成20年度公開ワークショップ 研究成果報告書』213-220.

- ⑧ 藤井聖子 2008.「話しことばの談話データを用いた文法研究：話し言葉で構文機能が強化する? —「～ないと」「～なきゃ」「～なくちゃ」の文法—」長谷川寿一・伊藤たかね・C. ラマール (編)『心とことば——進化と認知科学のアプローチから』, 129-151. 東京大学出版会

[産業財産権]

- 出願状況 (計 0 件)  
○ 取得状況 (計 0 件)

[その他]

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

藤井 聖子 (FUJII SEIKO)  
東京大学 大学院総合文化研究科・准教授  
研究者番号：70165330

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：